

# 日中古代女性作家の「苦境」と「楽境」

—日中古代の「家庭エコロジー」の差異を切り口に—

まえおき

文化的巨匠が「巨匠」となり得るために、その生まれつきの才能、ゆるがない志、勤勉な自己修練は欠かせないものである。しかし一方、我々がしばしば「何ゆえその時代に、幾人もの巨匠が輩出したのか」という疑問を持たずにはいられないように、「その時代」もまた、「巨匠」が育まれる必要条件であり、より重要な条件であるとさえ言える。なぜならば、いわゆる「時代」は、個体としての人間が拒絶したり切り離したりすることの出来ない精神的・物理的環境であり、「巨匠」はそうした環境次第で、成就もされれば扼殺もされるからである。

日中両国の古代女性文学を読むと、一度ならず以下の疑問に悩まされた。すなわち、日本の平安時代において、女性作家は夜空の星のごとく燦然と輝きを放ち、その作品の豊かさ、作品体裁の多様性、質の高さの全体から言えば、日本の文学史上において空前絶後と言えるのみならず、中国古代の女性文学も比肩できるレベルではない。では、当時堂々と世界に聳え立ち、そのため長い間日本によって学ばれ模倣されてきた文化

大中国の本土において、なぜ平安朝に見られるように、女性によって創作された長編小説や、女性が自らの人生を記した日記文学、女性を主とする文学サロン、大量の女性の個人的な詩歌集が現れなかったのか。なぜちらほら見られる作品から、すでに中国古代の女性詩人の優れた胸襟・教養・見識が十分に見て取れる一方、女性の文学創作はそれほどに寂寞たるものであったのか。これらの違いは「天才」の有無によるものか、それとも時代的背景によるものか。この領域の一研究者として、筆者はこれらの疑問に遺憾と戸惑いの情を覚えずにはいられないだけでなく、またその答えを探索する責任をも感じている。

そこで、本稿では日中両国の関連史料と文学原典に依拠し、日中両国の女性文学史と文化史の学際的な検討を通して、両国古代の婚姻や財産といった、女性の生存基盤にかかわる法律制度及び倫理意識、文学観などの異同を考察し、女性文学の繁栄如何にかかわる深層原因を究明し、今日の女性文学を考えるための座標を一つ提供し、古典文学研究の、「古を以って今を鑑みる」という価値と意義を再確認する一つの試みとした

い。

具体的な考察範囲は、日本の平安時代と中国の漢・唐時期の比較をメ

インとする。その理由は、四百年近く続いた平安時代（794年～1185年）は、日本の文化史において特殊な意義をもつ時代であり、日本文化の個性——その生活様式、宗教状態、審美的特徴など、多領域に亘って、この時期に確立されたものだと考えられるからである。平安文学は、後世の日本文学の特色の基調を定めたとも言えるであろう。なんぞくこの時期の女性文学が、疑いなくその主な構成要素であり、紫式部の「物語」、清少納言の散文、和泉式部の詩作、道綱母の日記などは、輝かしい光を放している。女性が史料に記載されることすら珍しかったあの時代で、生まれ育ちのほぼ判る女性作者は66名にも登り、且つその多くは、中下流貴族の娘であり、個人の詩文集が世に伝わっている者も多い<sup>①</sup>。それに比べて、三千七百名余りの唐代詩人による五万首あまりの詩作を収め、時間的範囲が唐から五代（約三百五十年余りにおよぶ）にまで及ぶ「全唐詩」<sup>②</sup>——当時、女性の創作は他の体裁を取ることはめつたに無い——に見られる女性作者は、筆者の調べではおおよそ70数名に過ぎず、出自の判る者は、后妃、名門貴族の娘、そして少数の名妓を含めても、半数にも及ばず、個人の詩文集が世に伝わる者なら、さらに少ない。日中の差はこうまでに甚だしいものである。賢愚の差ではないことはさらに贅言する必要もないが、歴史が示してくれた差異をいかに理解すればいいのかを考える時、やはり婚姻形態と財産制度、そしてそれらを枠組みとする女性の倫理意識などの、女性の生を支える「根本」を問わなければならない。

古代女性文学の創作原理について、筆者はすでに権力を持つ側の要求、女性の教育・文学意識の発達、そして女性の自我の意識と生命意識の獲得など、いくつかの面において検討してみたが<sup>③</sup>、ここでは新たに、法律と倫理観の面から、上述の日中の差異について、省察を行いたい。

境地に陥ることを意味している。さらに、嫁いだ女性は厳しい尊卑（すなわち権力）の秩序と「孝」や「婦徳」などの倫理規範により行動が制限され、常に周囲の夫の家族の監視と管理の下に置かれ、完全に自由が無くなり、日夜気を遣わなければならない状態にあったことを推察できる。それなのに、夫の家に下された刑罰を妻の家族まで受けなければならぬ所謂「連坐」制度が秦漢以前から実施されて、後世までずっと引き継がれたことは周知のことである<sup>④⑤</sup>。

こうした宗法制家庭形態は、時代の推移に伴って変化があるものの、その変化は倫理意識と法制度の面において、より男性の権力を強めるものであった。先ずは「性倫理観」の絶対的な男性本位化が行われた。権力階層による現実生活での貞操への倫理的強調と権利上での賞罰が、女性の人生を更に制限する現実的桎梏と化した<sup>⑥</sup>。性倫理観は貞操を女性の生命よりも上位に置き、男尊女卑を自然の摂理として標榜し、女性を禁錮と犠牲という運命に甘んじさせ、自らの人生の状態と生存意義について思考する意欲と能力を失わせ、理不尽にも一生を夫に託し、生殺与奪の権を全て夫の家の意志に任せざるを得なくした。そうした庶民女性の悲惨な運命を映し出す物語として「孔雀東南飛」という五言詩があり、貴族令嬢の婚姻の真相を暴くものとして陸游の正妻の離縁させられた実話があり、下層女性を家畜視する実例として、石崇が客に酒を勧めるために妾を次々と殺すエピソード、妾を馬と交換する蘇軾、晩年になって妾を離縁する白楽天など枚挙に暇ない。そうして心身の自由が少しもなく、宗法制度の幾重もの圧迫の下で生活する者として、言うまでも無く、真の文学創作はほぼ不可能である。才能豊かな陸遊の妻であった唐婉でさえ、初めて嫁いだ家の姑の嫉妬をかわすこともできなければ、再婚した夫の家で自由に胸中を文字に託すことも、到底できるものではないで

## 一 婚姻の開放と制限

言うまでもなく、何者たりとも、まずは「いかに生存するか」という問題に直面しなければならない。逆に言えば、「生存状態」はその人の生命を軌跡づけるものである。では、例えば平安時代の中下流貴族の出である紫式部という女性は、いかなる「生存状態」の下で54巻にもおよぶ大作「源氏物語」を創作したのか。言い換えると、平安時代の女性作家は如何なる「家庭」の中に自らの「作家」人生を全うすることができたのかを考える時、先ずは日中古代家庭形態の比較から考察していかなければならぬであろう。

古代において、日本であろうと中国であろうと、女性の生存は完全に家庭に依存したもので、社会活動に参加する可能性が極めて少なかった。周代から始まる中国の厳密な宗法家庭形態について、今日では気鋭の学者たちのお陰で研究がきわめて進んでおり、その多大な成果は古典文学の研究にとっても有力な視点を提供してくれている。関連研究について筆者のわずかな知識によれば、夫婦が独立した「核家族」であれ、親兄弟とともに住む「大家族」であれ、「一夫一妻多妾」と「女性が男性側の家族に入る」というスタイルが、中国古代の婚姻の基本的な形態であった。つまり、家族の性質は、厳格な「嫡庶」「長幼」という尊卑・権力関係を内包する構造を特徴とし、女性が男性に嫁ぐということは、完全に夫の家のこうした社会関係の中に嵌め込み、出身家族との関係を離脱することを意味した（もちろん、家族勢力が強大な女性は少し違うが）。そのため、嫁いだ娘は通常「覆水、収め難し」として譬えられる。こうした家族形態は、女性が嫁いだ時点から、心身ともに完全に「孤絶」の

あろう。

一方、日本の平安朝の女性をとりまく状況はいかなるものであったか。平安時代まで、日本の婚姻形態は母系社会の影響を色濃く残していた。十世紀になってようやく、日本社会は家族史に言う「固定家族」の形成期に至ったが、しかし依然と「通い婚」の形態が保持されていた。すなわち、夫は妻の家族と共に住む「妻方居住婚」または両方の親から離脱した「独立居住婚」という形態であった。夫婦の住宅は通常女性側が提供し、男性側が提供する場合でも、女性はめつたに男性の家族と一緒に住むことがなかった<sup>⑦</sup>。そうした男性の家族から独立した婿入り婚という家庭形態は、まず女性の日常的な身体的・心理的安定を保障することになる。七世紀あたりより全面的に中国を模倣してきた日本社会ではあるが、その数百年に亘る各種の学習プロセスの中で、中国式の宗法制家族制度を終始受け入れず、かつ伝統的な開放的で緩やかな性倫理観を持続させた。「通い婚」形態は「一夫多妻」制であるが、中国の「一夫一妻多妾」という婚姻形態とは異なり、妻同士は大体において対等であったようだ。子どもの有無が一般的に夫婦の絆となり得たが、妻の間には中国の宗法制家庭にあるような女性同士の尊卑秩序とそれに伴う幾重もの圧迫は存在しなかった。勿論、妻はやはり随時見捨てられる危険はあったが、しかし、彼女たちにも選びなおす自由、そしてより多くの選択肢があった。いつてみれば、複数回の恋愛、離婚、再婚、独身、出家などにおいて、社会的な倫理道德の禁錮と圧力を心配する必要はあまりなかったようである。当時の才女名媛清少納言、和泉式部、伊勢などは、いずれも数回の自由な恋愛と再婚の経験を持っていたと見られる。伊勢は宇多天皇の愛人になったことさえあり、にもかかわらず、通常の貴族女性としての生活に支障をきたすことはなく、後宮の妃たちによる迫害や仏

門に送りこまれることや死を以って天皇に殉ずるような憂き目に遭ったわけでもなかった。女性と子孫の、男性に対する従属的な地位は徐々に強化されていったが、十七世紀の初めまで、女性の心身の自由を特定の男性に絶対的に限定するような貞操意識は、日本社会において格別重要視されたわけではなかったようだ。

その点に関していうと、生存空間が相対的に独立していること、家族関係が相対的に緩やかなこと、そして性倫理意識の寛大さが平安朝を生きた女性の心身にもたらした自由度は、当時の中国女性の想像力の極限さえも超えるものがあつた。藤原兼家のような当朝第一権力者でも、妻としての道綱母によって断固として夜空の下に締め出され、妻の家に入れなかったこともあつた。こうして、夫が前日家の前を通りすぎたのに訪れないで別の妻の家にいったことによる傷つきと屈辱を発散することは、当時中国の女性にとつてみれば、「神話」に近い話であろうし、同様、和泉式部が自宅にいて、皇子の誘いに悩んで彼のところに居を移すかどうか葛藤したり、紫式部が内裏から身を引いて家に隠居し、静かに自らの人生と向き合つてそれを日記に記し、かつ仲間の人生についての観察と女性としての痛みへの省察を長編の創作にまとめあげること、夢にも全く望めない贅沢なことであつただろう。

中国の歴史上にも、女性が相対的に自由な時代——例えば漢の初期、六朝、唐代から宋の初期まで——が存在し、現実において自由な恋愛、離婚、再婚はある程度・範囲においては可能であつた。しかしその可能性は一般的なものではなく、法律と倫理観の両方において、制限は確実に厳しくなる一方で、夫の権力を強めるといふ単一な傾向を示している。漢代の法律において、すでに夫婦喧嘩のことに關して妻が夫に傷害を与えたら厳しい刑を受け、夫側の親や年配者を傷付けたら極刑にされるが、

夫は妻やその親などに傷害を与えた場合は軽い刑罰で済むことを規定している<sup>④⑤</sup>。唐代にもなると、夫が妻・妾を殴り殺しても償ふ必要はなかった。実際に、唐代の女性歩非煙のように、隣人の書生と愛し合ったために夫に殴り殺された例や、才女魚玄機が、正妻に受け入れられず、道教の尼寺に送り込まれた例などが一般的であつた。

現存する作品から見ると、比較的に多くの作品を残したのは、魚玄機、薛濤、李冶といった出家した女性または花街の女性である。比較を通して言えることは、そうした立場の中国の女性たちの生存状態こそ、平安朝の女性と大変よく似たものであり、中国の正統的な倫理観の束縛の外にある存在として、彼女たちは通常の女性にない心身の自由と、幅広い社会的経験を通して得た見識があり、さらに、男性の文化的需要に迎合するために精進した学問的素養も身に着けており、当時の文化的著名人（男性たち）でさえ、憧れと尊敬を抱かずにはいられなかった<sup>⑥</sup>。こうした状況を示す文献を目にするたびに、女性である筆者は感慨を禁じえない。中国古代の女性の生存状態は「苦極まる」だと言えよう！それに比べて、日本の平安時代の女性は実に「幸甚」と言えるのではないか。家庭に入つて日夜心身の重荷を背負う女性にしても、魚玄機など尼寺や売春宿に身を託す女性にしても、中国古代の女性の人生は苦難に満ちていただけではなく、そうした人生への感想を表現する自由すらなかった。その点から言えば、平安朝女性文学の繁栄はまさにあるべくしてあつたと言えよう。

## 二 生命の支えの有無

一般的に言えば、社会のどの集団または階層の「生存状態」も、根本律疎議・戸婚」によると、女性は信仰自由もなければ、財産分与も女性子孫と一切関連がないとされている<sup>⑦</sup>。また「女戸」となる条件は、家の中に男性が、未成年の男性も含んで一人もいないことに限り、女性の「外職」つまり家庭の外での職に就く権利もほぼ剥奪された。法律の女性に対する免責等が赤子同然な点からも、女性は全く独立した個体として見なされず、完全に男性の私有財産のごとく位置づけられていることが見て取れる<sup>⑧⑨</sup>。確かに彼女たちはいかなる権利も持たない、生存権さえも夫の手に握られていたのである。「大戴礼記・本命上」に見られる「七出の法」は後の世の不変な鉄則となつたが、他の六項目はさておき、「窃盗」によつて離縁されるケースだけを見てみよう。女性は家の中の財物を隠し持つだけで「窃盗」として処罰される。つまり古代の女性は私有財産が一切ないため、家の中のものを隠し持つだけでも窃盗と見なされたのである<sup>⑩</sup>。

不幸で落ちぶれたなら、兄弟や両親は救済の義務をも負っていた。上述の女性の生存権利の法律上の保障は、古代中国の女性が到底望めないものであつた。周の時代より、女性の生存権利は絶えず剥奪される一方であつた。周の時代では、貴族女性はまだ夫と比較的に対等な地位を持ち、祭祀に参加し、主権することもでき、独自の祭祀を享受する権利や財産権を持つことが出来た<sup>⑪</sup>。しかし、秦・漢以降、女性が財産を所有するという歴史的記録を目にすることが難しくなつた。秦・漢の史料によつて、当時はまだ女性の世帯主が存在し、財産権と支配権を持つことができた——勿論、条件は家庭の中に成年男性がいない場合であるが、特殊な状況下で、女性は特定の社会活動に参加することもできたことが窺える<sup>⑫⑬</sup>。しかし隋・唐の時代になると、女性の権利は赤子同然になり、一個の「人間」としての資格が完全に失われた。たとえば「唐

生命体の維持には、もつとも基本的な生存空間と物質が必要だということ、言わずと知れた自然の理である。これらの最も基本的な条件さえも全て、他人の手に掌握されている時、生命自体は常に危機的な状況にあるというのは自明のことである。生存したければ、心身とも支配者の意思に服従しなければならぬ。これが古代中国の女性の普遍的な生存状態である。もちろん、史料からはまれに、夫婦仲良く義理の親も親切である家庭の話が見られるが、しかし法律上の位置づけから言えば、女性が男性に完全に従属するという社会的地位は変わらない。いわば、「無一物」とも言える中国古代の女性の極端な「苦境」に生きているのに対し、一方日本の平安時代の女性はまことに「楽境」に生きていると言えよう。両者の「生」には雲泥の差があつたのであり、基本的な人身的自由と生存の保障さえもない状況下で、古代中国の女性が文学創作に取

り組むことは不可能に近いということは明らかである。

### 三 文学観の是と非

文学の目的はどこにあるか。誰が創作し、誰のために創作するのか。中国の悠久にして膨大な文学史の始まりの頃に、既にこれらの問いへの標準解答が与えられていた。即ち、「詩経」の冒頭の大序に記されているように、「夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を厚しく、教化を美し、風を移し俗を易ふ」ことである。こうした文学観はそれ以降二千年余りの歴史の中で、常に中国で文学作品を評価する基準とされてきた。こうした「上を勧め下を化す」責任を担うのは、当然君子でなければならぬ。しかし、歴史の発展に伴い、男性たちは賢くも以下のようなことに気がついた。すなわち、文学自体が持つ美的特徴は天地の「原道」に合ったもので、必ずしも政治や教化に貢献するだけではなく、その「綺麗」さは、単に心を愉しませるものであってもよかった。また、花や鳥さえもその美や歌声を表現することができる以上、生命体としての女性も、当然自分たちと同様、悲しみや喜びを言葉で表現する資格があると認めざるを得なくなったし、その上、言語によって、彼らが期待し、発見した女性の美を表現することは、男性にとってもなによりも楽しいことであつたと。そうして、中国の文学史に、政治と無関係な、風花雪月のみを歌った唯美的な「玉台新詠」の詩が出現し、「会真記」といった艶やかな伝奇が出現した。その最たるものは、沈約などの男性文化的リーダーたちが女性を擬して作った多数の詩作であろう。しかし、それらは男性創作者による男性享受者のためのものである事実は変わらない。というのも、読み書きが出来てかつ文学作品に触れることの出来た女性は、ほん

そして日本古来の伝統的な詩歌形式によって花鳥風月、人生の悲しみと喜びを吟詠することは、平安朝女性の自己表現と対人交流のもっとも風雅な仕方ないし必須のスキルと見なされていた。さらに、これらの完全に個人的で、「嚴肅」でも「端正」でもない作品は、男性たちの賞賛と追隨さえも呼ぶものであつた。絶えず中国女性によって書かれた中国の「女戒」の類の説教型の作品とは対照的に、平安朝の女性の作品は「源氏物語」式の、男女の情愛をテーマとするものもあり得たのであつた。そんな彼女たちは「淫婦」呼ばわりされるどころか、天皇の賞賛さえも得られたのである。つまり文学創作の大義名分や「女徳」などの倫理観が日本古代女性文学の障害にはならなかったのは、またその繁栄を支える不可欠の社会意識だと言えよう。

### 結び

以上によって、日中両国古代女性文学の差異とその深層にある原因について、三つの異なる側面から検討してみた。現存する数少ない中国古代の女性の作品について言えば、その質の高さは驚嘆すべきものであるし、さらに、六朝時代から唐までの期間だけを見ても、人生において少しでも創作する余裕のあった女性たちには、相当数の詩文を書き、書籍にさえ書き上げたものがあつたと、歴史の記録に見られる。例えば左芬には四巻の作品集があり、謝道韞は二巻の文集があり、劉令嫻、沈滿願にはそれぞれ三巻の文集があり、上官婉児・武則天には百巻にのぼる文集があり……ここではさらに列挙はしないが、残念ながら、彼女たちの心血の結晶である作品の大半が「散佚」と記され、歴史の塵埃に埋もれてしまったのである。社会全体の不認可と軽視は当然こうした結果をも

の僅かな少数しかいなかったからである。また、公的に認められる作品は、依然として経国濟世の「志」を継承する伝統的な文芸理念下の男性「詩歌」であつた。

以上により、女性の文学創作への参加は、大義名分の時点ですでに「大雅之堂」から排斥されていることが見て取れる。女性創作が認められたのは、せいぜいわずかに夫との唱和や恋人、権力命令下での詩作などに限定され、出家者や花街の女性の感情の表現や彼女たちが特定の男性との文字の交流など作品は個人的に伝えられるものとして殆どは歴史の中に消えてしまった運命であつた。「全唐詩」に記録されている数少ない女性作者は、わずかな皇族や貴族階層に属する女性以外、殆どが出家者や花街の女性でしかなかったという現象も理解されよう。

それに対して、平安文学の大きな特徴として、一般貴族出身の女性作者が多いことはいうまでもない。それらの作品の想定する読者は主に女性と子どもで、勿論男性貴族も含まれる。つまり、平安時代の女性は自主的な娯楽の権利と形式を持っていたといえる。彼女たちは自由に創作する空間と時間もあれば、社会からの需要と賞賛もあつたのである。千年余りの時が流れても、彼女たちの文学——物語文学、個人の日記、私家集などが多く残されている事実は、社会集団全体が大切に受け継いできた結果にはかならない。

中国の正統的な文学理念は他の思想や観念と同様、早くから日本に伝わり、日本の権力者によって——例えば平安初期の勅撰三部漢詩文集の序文のように——取り込まれたことがあるにもかかわらず、全部丸ごと自分の理念に化したわけではなかった。その点については既に詳しく考察してみた(参考文献③を参照)。古代日本人の自作の文字「仮名」によって創作することは、初めはどうも平安朝女性たちであつたようだ。

たらしただ重要な原因だと思われるが、もう一つ、考えさせられる状況がある。即ち、唐の孫氏が、「ある日怨んで曰く才思、婦人の事にあらず。遂に其の集を焚す」<sup>⑩</sup>という「自焚」行為である。二千年余りの歴史の中で、女性の存在が絶えず矮小化され、無視された結果、女性自身でさえも自らの存在価値と能力に絶望するようになったからである。

ところが、人類文明が著しく進歩し、女性の地位が高まっている今日、陳腐な倫理観念は果たして完全に根絶されたと言えるのであろうか。社会生活の形態は、もはや女性の創作意欲と行動の可能性を抑圧または制限するものではなくなったのであろうか。もし日中古代女性文学の差異に対する本論の検証と得られた所見が、これらの問いについての関心と思索を深めるきっかけになれば、まことに幸いである。畢竟、女性は人類の半数として、人類文明の進化に与えたものは、目下我々が知ることのできる限界をはるかに超えるものである。これについての研究によって明らかにする領域を絶えずおし広げることが、この偉大とも言える時代の賜物でもあり、真剣に取り組む価値のある仕事だと筆者は深く感じている。

### 参考文献

- ① 鈴木一雄「平安女流文学者総覧」『国文学 解釈と鑑賞』8 一九六〇年 至文堂
- ② 《全唐詩》中華書局於一九九二年出版
- ③ 拙作「日中古典女性文学の比較研究」日本風間書房出版 二〇一〇年十月
- ④ 《礼法与信仰——中国古代女性研究論考》蒲慕洲主編 商務印書館二〇一三年六月
- (1) 「秦漢的女子參戰與親族隨軍」孫博文
- (2) 「河河流域與中國秦漢的婚姻法令」林淑娟
- (3) 「漢代婦女與分家析產」莊小霞

- (4)「從《唐律疏議》看婦女的『外』職」李志生
- ⑤《中國婦女生活史》陳東原 上海書店出版社一九八四年
- ⑥『平安朝の母と子』服藤早苗著 中央公論新社出版二〇〇〇年
- ⑦《唐才子傳校箋》傅璇琮主編 中華書局二〇〇二年
- ⑧《金文與殷周女性文華》曹兆蘭 北京大學出版社二〇〇四年
- ⑨《唐律疏議·戶婚》岳純之點校 上海古籍出版社二〇一三年
- ⑩《中國古代婚姻史》陳顯遠 山西人民出版社二〇一四年十二月 P 45、46
- ⑪《歷代婦女詩詞鑑賞辭典》沈立東 葛汝桐(等)主編 中國婦女出版社  
一九九二年 P 1814